

---

# 幼なじみと俺と

出下夕御

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼なじみと俺と

### 【Nコード】

N44010

### 【作者名】

出下夕御

### 【あらすじ】

幼なじみとのやり取り。それをテーマにして書きました。

俺の名は加々美結城。普通の高校生だ。

俺の住む町は、ただ何とも無い普通な町だ。あるのは、樹齢三百年を超した木や、畑を耕す近所のおじいさんおばあさん達、そして未来を育む為に成長していく若者達だ。

ある土曜日。俺は不愉快な起床をするハメになる。

今日は休日だし、遅く起きようといまだ熟睡中の俺。休みの日は、こうやってゆっくりと過ごすのは、この上ない幸福だ。それが…。

ドタドタドタ……

ガラッ

「ゆう君オハヨー！」

「……」

当然俺はまだ眠っているから、俺を呼んだ奴の声は聞こえて来ない。

俺を呼んだのは、幼なじみの照井澪。家はお隣りで、俺の部屋の窓を開ければ、彼女の部屋の窓が目の前にある。同じ高校の同じクラス。容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能と三拍子揃っている。しかし、成績とスポーツは俺の方が上なのだ。ここだけの話、彼女は学校一の体型だ。

「ゆう君！起きなよ！」

何故俺が彼女に起こされなければならぬのだ？平日なら構わない。俺は朝は滅法弱い方だ。その俺を、毎朝起こしてくれるのは、有り難い事だ。

「もう！起きないなら、やっちゃんもん！」

「！！！」

俺は突然なことで目を覚ました。彼女の唇が、俺の唇を覆う。この行為は、俺が彼女が四歳の頃から続いている。俺としては有難迷惑な事だ。

「何すんだ！」

俺は彼女から放れて、怒鳴る。

「だってえ、ゆう君起きないんだもん」

「だからって、限度があるだろう？」

「気を付けまーす！」

俺が言った言葉に、あどけた口調で答える漣。その仕草が、ここ最近眩しく思える。

俺は彼女がこんな朝っぱらから、何しに來たか尋ねた。一つは俺を起こしに來た事だ。

「忘れたの？家のパパとママが結婚記念の旅行行ってるんだよ。しかも今はインドだって」

「で、朝飯を頂戴しよう?。」

「うん」

俺は内心呆れた。仕方無い事だ。彼女の作る料理は、お世辞でも美味しいと言えない。

「コーヒー付きならいるか?。」

「うんいいよ」

「取り合えず、部屋から出ろよ。着替えるから」

「えーっ? いいじゃんいたって」

「朝飯がほしけりゃ、俺が着替えるまで入るんじゃねえ!!」

俺は澪を部屋から追い出した後、さつさと着替えた。ついでに言うが、俺の両親は海外で仕事をしている。親父はコロンビアでお袋はネパールにいる。

部屋を出て、澪と合流した俺は台所へ向かった。夕べの内に仕掛けた米は、ふつくと炊いてある。味噌汁は、夕べの残りの青野菜の味噌汁にする。献立は、この前近所のおばさんから頂いた煮豆ときんぴらだ。

朝食が終わると、澪が俺に声をかけた。

「ねえ、ゆう君」

「何だ?。」

俺はそっけなく答えた。

「今日さ、何処か行こうよ！」

「何処に？」

「ちょっと買い物。だってゆう君の私服少ないもん」

「は？ちよつと待て、お前が何か買いたいからいくんじゃねえのか？」

「だってゆう君、自分の服に関してさあ、疎いじゃん。同じクラスの男だって、カジュアルな服装じゃない」

「生憎だが、俺は服装を乱すのは嫌いだ。尚且つ、俺の欲しい服は俺が買うから結構だ」

俺が言った後、漑はシュンとした顔で俯いた。こういう世話焼かせな所が、またいいと思う俺だが、時によってちよつとウザく感じる。

「ゆう君と行きたかったなあ……」

途端に、漑は俺をうるうるとした目で見ていた。この目に俺が勝った事は無い。

「分かった！分かったから！俺行くよ」

「ヤッター！ゆう君とデートだぁー！」

言い忘れたが、俺と漑は恋人同士だ。が、それは漑が強制的にそうさせたのだ。俺の嫌いな教師の火山史和よりも厄介この上ない。しかし、何故か、拒否感が無いから否定もしない。

「行くんだったら、そろそろ行くぞ」

「あ、待ってゆう君。私着替えて来るから」

それから、何分間俺は待った事か。しばらくすると、家で見たととは違う服装だった。それに俺はつい見とれてしまった。膝より長いスカートに、白いブラウスの上に赤いコートを着ていた。

「お待たせ！」

「おっ、おう。あんまし待ってねえから」

といっても小一時間位だった。

「それじゃあ、しゅっぱーっ!!」

「しんこー」

自宅から目的のデパートまでバスで行くこととなった。この地域のバスは40分に一回でオールで運行している。こんな田舎にしては贅沢過ぎるのだ。

「ゆう君、さっきから何ぶつぶつ言ってるの？」

「あ……いや…何でもねえよ。心配すんな……」

「ならいいや。あ、でもさっきからさあ」

「何だよ…」

突然漣は俺の耳元に口を運び、開いた。

「さっきから私の体見てるでしょ？」

な、何故分かった？まあいい。取り合えず俺は答えることにする。

「べ、別にいいじゃねーか。悪いか？」

「悪く無いもーん」

彼女の茶色の髪が、先程から俺の鼻に、甘い香りを出していた。

「お、そろそろ着くぞ」

バスは目的地に到着し、俺と漣はバスを降りた。

俺は漣に強制連行され、とあるショッピングモールに到着した。しかし、俺はこの場所を知らない。

「そつえば、ゆう君ここ初めてだよね？」

「ああ、初めてだ。しかし客多いな、何かあるのか？」

「ここはね、本屋さんとか、CDショップとか、映画館とか、食べ物屋さんとか色々あるよ」



「外で見るより、結構広いんだな。こりゃ、迷いそうだな」

「昔みたいに迷子にゃなんないでね？」

「だから、あん時はお前が迷ってただろ。『わーいウサギさーん』  
『わーいかめさーん』って着ぐるみ追っ掛けて、俺が捜すはめにも  
なったんだ」

以前：というか、ほんの一昔前だ。小学校の入学祝いに、俺のお  
袋と彼女のお袋さんとの四人で、デパートへ出掛けた時だった。

当時澪は無類の着ぐるみマニアだった。たまに遊園地で風船を持  
った着ぐるみさえも『やあだあ！お家にもちかえるんだもん！！』  
と連呼していた。その癖があつてか、デパートで澪だけ逸れてしま  
ったのだ。

そして見つかったのは、社員用の控室で石化していたのを、係り  
の人が見付けてくれた。

「ま、あん時の澪も可愛かったと思うな」

「もう、ゆう君ったらあ！！」

「馬鹿！でっけー声出すなよ。……他の男がお前に注目しちまうだ  
ろ？」

「そんな事無いもん。ゆう君が1番だもん」

まあそんなこんなで、目的を果たした俺達は帰り道を歩いていた。

「ゆう君は、進学するんだよね？」

「ああ。専門大学から推薦来てるからな。漣は？」

進学する俺に対し、漣は言った。

「就職だよ。夢だった保育士になるために今まで頑張ったんだもん」

彼女は就職。下手すれば、俺達は離れ離れになってしまう。そんなのは御免だが、これは運命だ。今しか言うつきゃねえ！

「なあ、漣」

「なあに？」

真剣に言った俺に対し、漣はあどけなく返事した。

「俺達は、一生一緒だ。俺は、お前を……漣を一生愛している！」

「ゆう君。私もだよ。一生一緒だよ？私……加々美結城が大好きですっ！」

「俺もだ！俺も照井漣が好きだ！」

やがて俺達の距離は縮まり、重なった。俺に対する漣のキス癖は、二人の物になった。

卒業まで、一年と数ヶ月。俺達は、残りの青春を歩んで行った。それが、【幼なじみ】から、完全な【恋人】になった証だ。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4401o/>

---

幼なじみと俺と

2010年10月22日01時41分発行